
恋のキューピット 怨霊版

HOLY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューブピット 罪靈版

【Zコード】

N8712C

【作者名】

HOLY

【あらすじ】

ひょんなことから死んでしまった主人公。幽霊となつてその恨みを晴らそうとするが・・・。

冬。刺すような寒さが身にしみるその夜、

おれと英之は出合った。
ひでゆき

英之とは同じ学校だったけれど、とくに面識があるわけでもなかつた。

英之は大人しくて目立たないタイプ。特にこれと書いた特徴もない。一応、名前だけは知っている。そんな『関係』と呼べるのかどうかも分からぬ関係。

少し暗くなつた帰り道で、おれの反対側からアイツは歩いてきていた。

静かな道に街灯がひとつ、またひとつと灯り、寒さをさらに増幅させる。

おれとアイツがすれ違つた刹那、

そんな道の静寂を英之は、…破つた。

『はつくしょおおいつ……』

その豪快なくしゃみで、おれの心臓は、…止まつちまつたんだよ
おつー！

だつてだつて、ほんとに吃驚したんだもんっ！吃驚仰天よー！心臓
麻痺よ！

いや、ほら、静かーな道でぞ、いきなり後ろからひょおおこ
！！

そりや 心臓も止まるぞーなー？寒かつたし！

んで、その後ワタクシは病院に運ばれたんですけど、間に合わなか
つたんだなー、これが。

で、いまおれは幽靈なのです。

いや、怨霊かな？

だつて、誓つたもん。

『英之を7代先まで呪つてやる』って。

*

『ふつふつふ

おれの死んだ翌朝の学校、下駄箱の前。

今日ここからおれの復讐が始まる。

へい、ザマー＝口英之ー！

誰にも姿が見えない、怨靈となつたおれは止められないぜ！

英之の下駄箱に入つていた上履きを左右逆に入れ変えた！！

次の日、アイツが読んでいた本のしおりを、5ページ前に戻した！！

その次の日、筆箱のペンを全部逆向きに入れなおした！！

そのまた次の日、意味もなく英之の体を何度もすり抜けた！！

またまた次の日、聞こえるはずないが、英之の耳元でただひたすらエーデルワイスを歌い続けた！！

またまたまた次の日、つい、女子更衣室に入った！！

そうして1週間が過ぎたころ、おれはあることに気づいた。

英之は授業中、斜め右前の席をよく見つめている。

今日もおれを通して目線は斜め右前。

その席に座っている人を、おれは知っていた。

美知みちと言つ名のその女子は、男子の間ではなかなか評価の高かつたからだ。

ショートヘアが似合い、おれが見てもかわいい顔立ち。でもって優

しい性格。もう、モテルモテル…。

しかし、彼氏はいない。

そんな美知を英之はよく見つめている。

…むふ。

ついにたあ、答えはひとつしかなこでしょ!つー!

『ひゅーひゅーーー』

誰にも聞こえないけど、ヤジを飛ばしてみる。

すると、英之はふつと笑った。

『…………え?』

まさか、おれの声が聞こえて?

『いや、違うな

振り返る。

… 美知が落とした消しゴムを拾つのに苦戦していた。

がんばって手を伸ばすけれど、届かない。

これを見てニヤついてやがったのか

「ほひ。」

美知の隣の席（つまりは英之の前の席）の男子が消しゴムを拾つてやる。

「あ、ありがとう。」

その男子にっこり笑いかける美知。

それを見た英之は今度はむつとしかめつ面。

：分かりやすゅぎるぜ。

その日の昼休み、弁当を食べる英之を見ていたときにこんな話が聞こえてきた。

「君、美知のこと好きらしによ。」

うわさ好きの女子たちの会話。

嫌でも耳に入る。

「えー！？ そうなの？ ××君も美知のこと好きだつてきいたよ？」

「あー、美知はモテるから。その気になればすぐにでも彼氏できるんでしょ？」

「いいなー。」

ふむ。なかなかに興味深い情報。

つい、と英之君の顔を見てみる。

当然今の話が聞こえていた英之君は……顔面蒼白。

そしておもむろに取り出すは……携帯電話。

メールの送信相手は……美知ちゃん……

『おおっ！？まさかまさか！？』

メールの内容は……「放課後に教室に来て。」

『ひやつぼーつー やるじやんかヒテコキー！…』

英之の周りで踊つまくる……

おれの復讐、最大のチャンス！

『邪魔してやるよー！覚悟しろー！』

覗き込んだその顔は、メールの返信を見ての微笑み。

放課後が楽しみだぜ！

*

そのあとおれは、放課後までずっと美知の耳元で

『英之をふれ〜、英之をふれ〜』

とさわやき続けた。

おれの思いは伝わっただろ？

そして放課後、夕日がなんともロマンティックに仕立て上げた教室に

オレンジに染まった英之と美知は一人つきり……。

ま、おれもいるから正確には三人だけど。

「話つて、なに？」

手を前で後ろで組んで少し上田づかいな美知。

うん、かわいい。英之なんかにはもつたいたい。

対する英之は机に腰をかけ、余裕をアピール。

そして、男らしく、口を開いた。

「ああ、その……おれと付き合つて欲しいー。」

真っ直ぐ美知を見つめて愛の告白ー。

『いいぞー！よく言ったー！』

思わず拍手。

『さあ、美知ちゃんの返事はいかに！？やべえ、テンション上がつてきたーー！』

うつむいて動かない美知。

10秒。

20秒

三〇秒

そして返事。

「その...」「めんね。

『いやおひしきあああああーーー』

英之、ふられた——！！

「… そうか、うん。わかつた。

『アーティスト・バイブル』

スカスカすり抜けるけど、英之の肩を叩く。

「ほんと、うれしいね。」

美知は教室から出ていった。

「……。」

『ふつふつふー残念だつたな、英之ー。』

がっくうとうなだれる英之の隣に腰かける。

英之はしゃべらない。

『いやー、すつきつしたわー。』

「……で……う。」

『可哀想だからじまらへ復讐はやめてやるよー……って、今なんか言った?』

ぼそぼそと何か言つている。

「……う。」

『ん?』

「……もう、一生独身で生きていい。」

『……はい?』

「人も、いいかもしない。」

顔を上げた英之はなにかを悟つたような、そんな微笑。

『はあ、一回ぶられただけでそんな決断しちゃうわけ?』

ま、いいけど。

いいけど?

いいの?

教室を出よっとかぬ英之

『……って待てーっ……』

叫ぶ。もがきん闇にえてないけど。

『まじまじま…!…そりゃ困るー子供作つてもりわないと、困るー!

7代先まで呪えなくなつちまひじやんかあ!!

有言実行派のおれとしては、Hヌジーー!! イツツベリーHヌジーー!!
! オッケイ!!』

必死で呼び止める。

『待つてつてば!!な!!な!!落ち着け、冷静になれ!

よし、話しあおひじや あないか!!』

後ろから肩を叩く、けどスカスカすり抜ける。

『考えてみるよ、子供はかわいいよー?はい、レッツイマジンー…

ほお~り、だんだん結婚したくなる!だんだん子供が欲しくなる!』

前に回り込んで「待つた」のポーズ。でもスカッとすり抜けた。

『だーーーおーーーたのむよお!!

もつこたずらしないからあつー……あ、それはないけど。』

しかしあれの抵抗むなしく、結局英之は帰ってしまった。

その夜、おれはある決心をした。

*

『はあ、疲れたわー。』

次の日、誰もいない教室でおれは英之と美知を待っている。

昨日と同じ時間だから外は夕暮れだが、今日のこの教室は暗い。

おれが暗幕を張ったから。

幽靈になつたらもう疲れないのかと思つてたけど、なかなかどうして疲労感がたまっている。

物を動かしたりするために気力も結構使つてしまつた。

でも、そのおかげで教室のセッティングはバツチリ。失敗する気がしねえぜ。

かつつかつかつ。

『おひ。』

教室にやつてくる足音。先に来たのは、どっちだ?

がらり、ドアが開く。

「え、暗い?」

昨日とは微妙に髪型が変わつたその人は美知ちゃんだった。

英之のやうう、女の子を待たせるとは最低やな。

「…あれ?なんで来たんだつけ?」

教室に入った美知はきょろきょろしている。

困惑するのも当然だ。昨晩、おれが夢枕に立つて暗示をかけたことに気づくわけがない。

かつつかつかつ。

そしてまた足音。

おれが暗示をかけたもつ一人のほうが来たみたいだ。

英之が教室に入った。

その気配に美知が振り返る。

…しばしの間。

「ひ、英之君？」

「あ…。」

口を開いたはいいが、さすがに気まずい雰囲気が漂つ。

10秒ほどの沈黙の後、英之が口を開く。

「美知…、その、『めん。』

『ああああああ…？』「『めん。』だあ？』の甲斐性無しが…！

もしかしたらもう一回アタックするかも、なんて思ったおれが馬鹿だったよ…。』

よおし、最初の作戦通りにやうとせてもひづ。

お互に視線をそらして固まっている一人の横を通して教室の入り口に向かつ。

そして、思いつきりドアを閉めた。

ぱーーーんつ！

「 「 ー..?」

驚いてドアを凝視する一人。当然おれの姿は見えてない。

「誰だ！？」

英之は駆け寄つてドアを開けつつある。

よしよし。女の子より先に行動したことは褒めてやるわ。

でも、ドアは開かないのだよ？

「どうしたの？」

「んつ。開かない。」

顔を見合わせる二人。

そして美知は開いているもう片方のドアに駆け寄る。

ぱーーーんつ！

すかさずドアを閉める。

「あやつ。」

驚いて飛びのく美知。

英之はドアを開けようとすると、ひどいぱり開かない。

一人は顔を見合わせる。

『暗い密室に一人つきり。ふつふつふ。

おふたりさん、次いくよお？』

「ぞ、ぞぞぞ……」

放送のスピーカーからノイズが流れる。

一人はこわばつてスピーカーを見つめる。

ノイズに混ざつて聞こえてきたのは、

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ。」

…「つめあ声。

「ひ！」

美知が小さい悲鳴を上げる。

そりやあ、おれの迫真の演技だもん。怖いでしょー・怖いでしょー・

どれ、英之はどんな感じかな？

「…。」

固まつてゐる。

『「このバカヤロー！」「大丈夫だよ！」とか「怖がらないで…」とか、なんか優しい言葉をかけねえか、根性無しーー。』

すかすかと英之の頬をビンタする。

すると、おれの気持ちが伝わったのか英之は美知によりそつた。

「だ、だいじょぶ。怖がらないで。」

スピーカーのうめき声にかき涙されそうな声だつたが、ざつにか聞こえたらしい。

「う、うん。ありがとう。」

美知は手探りで英之の手を、きゅっと握つた。

『うひょーーうらやましいじゃねえかコノヤロー！

台詞があれの言ったのとまったく同じだったのは大目に見てやるよお！

よし、次い！』

ぶつとスピーカーが切れ、うめき声が止まる。

今度は何の音もしない。

「……。」

一人も息を潜めている。

ガタガタガタガタ！！

「きやあ！」

突然の音に美知が英之に抱きついた！

おれはがんばって机を揺さぶる。

ガタガタガタガタ！！

『ポルターガイストだあー本物だぞー！？』

もういいだろうと机を揺さぶるのをやめて英之を見てみる。

美知ちゃんに抱きつかれてさぞかしうれしそうな顔をしてるのかと思えば、

顔面蒼白！？

「…英之君？」

抱きついていた美知が顔を見上げる。

「…あ。うん。」

せつかく美知ちゃんにこのトロ見せられたチャンスを演出してやつてんのにー！

カツ「いいとこを見せてやれ——もう一回」くれ——つ——』

卷之三

放心状態の英之

おいおい、
なに？ おれの努力は無駄だったわけ？

美知ちゃんも英之から離れてしまつた。

「大丈夫？」

「あ、うん。」

あーあー、女の子に心配されちゃって。

『だめだ』つや。

これ以上怖がらせても仕方なさそうだから、ドアを開けてやる。

「あ、せり、ドア開いたよー早く出なさい。」

引つ張られていく英之。

英之を蹴りまくる。

すかすか。

「ノゾ、ごめん。」

お、英之が口を開いた。

「おれ、本当にびびっちゃって。」

『ほんとだよーこの馬鹿ー7代先まで呪えなくなっちゃつただろ!?
?有言不実行になるーつー!』

英之を殴る。

すかすか。

「つづん。いいよ。あたしもこわかったもん。なんだつたんだろ?つ
ね?」

おお、「なんだつたんだろ?」で済ますのか。

美知、意外とたくましいな。

「心靈現象つてやつかな。もう、勘弁して欲しいよ。」

ため息をついて情けないと囁く英之。

「怖がりだね、英之君。」

『せり、女の子にこんなこと言われて悔しくないのかー。』

英之は面倒なせりに頭をかく。

「しょうがないなあ。あたしがそばにしてあげるよ。」

『…え?』

それは?

「え?」

もしかして?

「やつぱつ、英之君と付き合つてもいいよ。あたし。」

『ええー?』

「えええ?」

なにその急すぎる発言。

困惑するおれと英之。

なんだ? なにかプラスになる出来事があつたつけ?

ビビりまくつてた英之になにかステキなものでも見つけたのか?

へたれが好みとか?

「あたしね、守ってくれるつていう男の子はちょっと苦手なんだ。」

正解！？

「だから昨日はああ言つたけど、やつぱり英之君なら大丈夫かなって。」

「そ、そつなんだ。うん、じゃあ、その、よろしく。」

『おいおい、英之。なにげに失礼なこと言われてるのに気がついてるか？』

『へたれつて言われてんだぞ？おい？』

そして二人は突然の展開にもかかわらず、手をつないで帰つていった。

仲よさそう。

夕田に染められながら。

*

『…ふう。結果オーライー。』

“どうやらおれの作戦はとつあえず成功したらしく。

なにやらえりい疲労感。

しかし、これでの一人を付き合わせられたんだから、よしとするか。

『ああ、でも結婚とかもサポートしてやらなきゃならないのか？

子育てとかも？…うわあ、めんどくせえ。

でもまあ、これもアイツを7代先まで呪うため…』

…はっ！

ちょいと待ちたまえ。君。

…もしかして、7代先までこんな恋のキューピットをやらなきゃいけないのか？

えーと、…その、なんだ？

いやだあああ。

うわあー、めんどくせえ。

なんか急にやる気がひってきたなあ。

ビーしょっかなあ。

『うーん…成仏するか。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8712c/>

恋のキューッピット 犯靈版

2010年10月19日06時34分発行